

# 名探偵の恋

竜星

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

中学生になった江戸川コナンと灰原哀と周囲の人々の物語。

事件はありません。恋愛小説。二次創作初心者作品です。どうかお手柔らかにお願いします。

感想などをいただけたら励みになりますので、よろしく願います。

# 目次

中学一年生：江戸川コナン

File 1：江戸川コナン。新たな門

出 | 1

File 2：とある休日 | 5



中学一年生：江戸川コナン

File 1：江戸川コナン。新たな門出

江戸川コナンとなつて六年の月日が過ぎていた。

それまでの月日の中で、工藤新一の体を小さくした薬であるAPT-X4869の解毒剤を完成させることは不可能と言う事実が発覚。

工藤新一は江戸川コナンとして生きていくことを余儀なくされた。二度と工藤新一に戻ることはできない。

その事実が判明してからしばらくして、周囲の事実を知る人間の助言から工藤新一の死亡を公表することになった。

そして江戸川コナンとして生きている工藤新一は今、中学一年生。

「江戸川君。いくわよ」

かつて工藤新一の隣には、幼馴染の毛利蘭がいた。そして今、江戸川コナンの隣にいるのは、同じ薬で小さくなった灰原哀。

「博士やあの子たちが待ってるわ」

「おう」

入学式を終えた二人は、校門の前から手を振っている今では同級生となってしまう子供たち。光彦、歩美、元太。そして二人の真実を知る阿笠博士を見るなり、揃って思わず小さく笑ってしまった。

「コナン君。哀ちゃん。早く早く」

大きな声で二人を呼ぶ歩美の声。

「博士が写真撮ってってくれるってよ」

「早くしてください」

コナンは哀の手を握ると、走り出す。

「いこうぜ、灰原」

「それ。さっきわたしが言ったセリフでしょ」

ハハッと笑うコナン。

周囲でも入学したばかりの子供たちが写真を取っている。いつの時代も変わらないんだなと思しながら、周りを見てみると、隣に陣取っている哀が言う。

「キョロキョロしない。博士が撮れないでしょ」

「わりいわりい」

コナンは正面のカメラに視線を移した。

だが博士はなかなか撮ろうとしない。ああでもないこうでもないと言って、構図を決めかねているようだった。

「博士、早くしてくれよ。構図なんてどうでもいいからよ」

「そんなわけにもいかんよ。せつかくの記念じや。ピシツとした一枚を撮らねばの」  
「ったく」

ようやく構図を決めたのか、博士はカメラのシャッターを押す。

昔、散々撮られてはいても、フラツシユに思わず目を瞑ってしまふ。

写真を撮り終わって、解散かという時に、何かに気付いたように光彦が言う。

「コナン君。メガネはどうしたんですか？」

「ああ。コンタクトにしたんだよ。中学に上がったことだし、心機一転イメチェンするのもいいかと思つてな」

「……そうなんですな」

「でもなんか変な感じだな。おめえ、メガネがねえと別人みてえだぞ」

「んなこたねえだろ。同じ人間なんだからよ」

その言葉に哀が小さく笑う。

何だよと目で訴えかけても、無視される。

「コナン君。メガネなくてもかっこいいよ」

歩美が言ってくる。勢いのあつたその言葉に思わず、コナンは腰が引けてしまった。

「お、おう。ありがとう」

「……本当に、これからはメガネをかけないでいくつもり？ 組織はまだ存続してるのよ。いくら探偵事務所から出て、自宅で暮らすことにしたからってバレない保証はないのよ」

「心配すんなって。工藤新一は死んだ。顔つきが似てきたからって、さすがに蘭も俺を工藤新一とはもう思わないはずだぜ」

「そうだといいのだけれど」

哀の心配していることがわからないわけでもない。だが、もう周囲を欺くように演技して生きるのはごめんだ。自分らしくありたい。だから、メガネはもういらなかった。

## File 2 : とある休日 1

「おきななさい」

覚醒しきっていない意識の隅すみで、コナンは哀の声を聞いたような気がした。そんなわけはないなと思い、意識を再び眠りに向けていく。だが、コナンの体が揺らされる。

おかしいと思って意識をゆっくりと覚醒させて目を開けると、ベッドの脇に哀が座っていた。それに驚いたコナンは、勢いよく飛び起きる。しばらくしてからゆっくりとコナンは口を開く。

「あの、灰原さん。どうして俺の部屋に?」

「どうせ昨日も遅くまで推理小説でも読んで夜更かししてるだろうと思ったから、おこしにきてあげたの。感謝しなさい」

「それはどうも」

「早く着替えて下にきなさい。朝食作つてあるから」

自室に置いているデジタル時計を見ると、時間は十一時を過ぎていた。これは朝食ではなく昼食だなと思いつながら、コナンはダンスから服を出して着替えをはじめめる。

哀はと言うと、コナンが着替えをダンスから出している間に、ダイニングキッチンに

向かっていった。

コナンは自室に置いてある姿見鏡すがたみに目をやる。

小学生一年生のコナンの時が懐かしくなるほどに、今の自分がかつての高校二年生だった工藤新一に向かって成長している。

同じ人間であるのだから当然ではあるが、やはり変な気分になってしまう。

「着替えたことだし、さっさと下にいくか」

コナンはダイニングキッチンに向かうなりテーブルにつき、新聞を広げる。すぐさま哀がコーヒーを出してくれた。

「それでも飲んで目を覚ましなさい」

どうやらコナンは、いまだに眠たそうな顔をしているようだ。

「サンキューな」

「別に」

端的に答えた哀はそのままキッチンに向かうと、コナンの朝食を運んできた。

レタスとツナのサンドが三つに、目玉焼きとサラダ。これが哀の作ったコナンの今日の朝食。

開いていた新聞を閉じて横の椅子に置くと、合掌して言う。

「いただきます」

レタスとツナのサンドを一つ手に取ると、一口食べる。

「どう？」

「何が？」

「味に決まつてるじゃない」

「珍しいな。おめえがそんなこと聞いてくるなんて」

「いいから。さっさと答えなさい」

「うまい。先に言つとくけど、お世辞じゃねえからな」

コナンには哀の表情がどこか嬉しそうに見えた。昔の哀からでは想像できない。随分と変わったものだど内心でコナンは思っていた。

「それにしても灰原。どうして俺の家に。用事か？」

「言つたでしょ。おこしにきてあげたんだって」

「なんで？ 蘭みたいなことするやつだな。昔のおめえだったら、絶対にしないと思うんだけどな」

「無駄口叩いてないでさっさと食べちやいなさい」

「はいよ」

言われるままに手を動かして、コナンは哀の作った朝食を平らげる。量は多くはなかったものの、寝起きだった腹に満腹感を与えるには十分だった。

後片付けを哀に任せると、コナンはコーヒーを飲み干した後に書齋しよさいへと向かう。事件の資料や推理小説にアルバムなどの数々が並ぶ本棚。

アルバムは新一の頃のものもあれば、コナンになってから作られたものもある。本棚を見て回ったコナンはアルバムの一つを手を取った。それはコナンになってからのアルバム。

「何を見てるの？」

「ああ。小学校の頃のアルバムだよ。新一時代じゃなく、コナンになってからのな」

「そう」

座ってアルバムを眺めていたコナンの横から、哀が覗き込んでくる。

「そういえば。この頃はキャン普ばかり行ってたわね」

「だな。今でこそ数は減ったが、あの頃は月一以上でいったんじゃねえか」

「冬にいったこともあったわね」

二人がアルバムを見ながらそんな話をしていると、工藤邸のチャイムが鳴った。来訪の予定がないこともあって、二人は顔を見合わせる。

そのすぐ後にコナンは哀を伴って玄関へと向かった。玄関のドアを開けると、門の前には元太たち三人組の姿がある。

「おめえら、どうしたんだ？」

「博士の家にいっても誰もいねえからよ。コナンも灰原もこつちにいるんじやねえかと思つてきたんだよ」

「そつか。それより灰原。博士いねえのか？」

「ええ。知り合いと会うからつて、今日の朝早くに出ていったわよ」

「だからおめえ。朝から俺の家に来てたんだな」

「そういうことになるかしらね」

「コナン君。入つてもいい？」

「おう。入れ入れ」

「それじゃお邪魔しますよ」

光彦が言うと、元太が勢いよく門を開けて入つてくる。それに続くように光彦と歩美が入つてきた。

コナンは元太たちを書齋に案内する。

「広いですね」

「それにすつげー本の数だな」

「そうだね。ねえコナン君。どれくらいの本があるの？」

「さあな。俺も数えたことねえからな。千冊はあるんじやねえか」

コナンは歩美の質問に適当に答える。数を把握していない以上、正確な冊数を答える

ことはできない。

「そういえばおめえら。ここにくるのはじめてだったか？」

「ええ、まあ。リビングの方にはお邪魔したことはありますけど」

「そっか」

「それであなたたち。どうしてここに？」

コナンも思っていた疑問を哀が元太たちに投げかける。

「コナン君。哀ちゃん。皆で映画見にいかない？ チケットが五枚手に入ったんだけ

ど、どうかな？」

「俺は構わねえけど」

「いいわよ。断る理由もないしね」

「やった」

歩美はガッツポーズをして喜びを表現している。このあたりは昔から変わっていない。  
い。

「それじゃいこうぜ」

「おう」

元太たちはそそくさと玄関に向かって歩いていく。哀がコナンと並ぶ位置で足を止める。が、すぐにコナンと並んで歩きだした。

「休日にあの子たちを交えて出かけるのも悪くないわね」

哀の顔には笑みが浮かんでいた。

「随分と楽しそうじゃねえか、おめえ」

「どうしてかしらね。でも楽しみで仕方ないのよ。今までにも何度か映画をみんなで見に行ったことはあるはずなのにね」

どうして楽しいと思っているのか哀自身にもわかっていないようだった。

コナンは楽しいよりも、退屈しないという感情の方が強い。江戸川コナンとなつてからというものは、退屈だと思つたことは限りなく少なかった。

「あの子たちのせいかしらね」

哀は玄関で靴を履きながら、門の前で二人を待つ元太たちを見る。

「どうしてか。あなたやあの子たちと一緒にいると楽しいのよ。昔はそうでもないこともあつたのに、今じゃ楽しいと思うことがほとんどになつてるわ」

「いいじゃねえか。それだけただのガキになれてるってことなんじゃねえか」

コナンのその言葉に対する返しはなかった。靴を履き終えた哀はゆっくりと立ち上がって玄関を出る。

「コナン君。哀ちゃん。早く早く」

歩美の呼ぶ声が二人に届く。

哀は歩美たちと合流するなり、何かを話しているようだった。最後に工藤邸を出たコナンは、その様子歩きながら見ていた。そして小さく呟く。

「傍<sup>はた</sup>から見れば、ただの中学生にしか見えねえんだろ。アイツだけじゃなく、俺もなんだらうけど」

コナンも合流したことで、五人は工藤邸を後にして米花町にある映画館へと向かっていった。